

優秀賞

変化する時代の中、変えられぬ物へ

和歌山県立桐蔭高等学校 二年

石井 鶩

どこか優しく包まれるような太陽の光を受けて成長した和歌山のみかんは、他と一線を画する美味しさが無論生じる。その上、紀南へ行く高速から見える段々畑に言葉で表せない温もりを感じひどく心を打たれることがある。私たちは十年、百年後にこの美しい景色と出会うことができるのだろうか。

和歌山の未来を考える上で避けた通れないのが少子高齢化と人口減少であると私は考える。目を背けたくなる現実だが、毎日新聞を読むと、県人口はピーク時から四十年あまりで二十万人弱減少したと言うのだ。他の情報を見てもあまりこの二つの要素に関して良い印象を持つものはない。私が和歌山の未来に不安を覚えてしまうのも主にこれが原因である。若者が外の世界へ出ていくことを批判しているわけではない。ただ、みんなや世界遺産、美しい景色などたくさんの魅力がある和歌山から人が減っていくのが虚しいのだ。

延期になつていたブルーインパルスが青い空を駆けていく夏のある日が私が初めて万博に行く日となつた。雲一つない空の下行われたその世界は未来が現在になる、夢が現実と重なる、そんな世界であった。何も大袈裟なことではない。君達は空飛ぶクルマやロボットと共に共生する未来を想像できるであろうか。だがこれは私達が生きる、これから見る世界である。

歩いていた時ふと気になつたのはリモート診断用ドローンの姿や人の力いらずで自動で車が動く様子を見たことであつた。これがもしあれば、とふと考えてしまう、というのも病院というものは決して近くにあるものではないのに加え自動運転が可能なら、いつか診断を行う人口知能が現れてもおかしくはないと感じた。ただこのような事例は前述した和歌山の問題の解決に

繋がるのではないか。

例えば歩くことができない高齢者はリモート診断を使うと便利なのは明白として、その時に使われるドローンを利用してみかん畠の観察をすることもできる。他にも、自動で歩行者を認知して避けるシステムがあるなら、自動で熟れたみかんを探ることだって容易であろう。高齢化が進み後継者も少なくなる和歌山でこんなことができたら、きっと私の故郷は少し見え方違えど他に自慢できる世界を作りだしてくれるはずだ。

機械と暮らす時代が迫っている。

今まで機械の多用は人間を何もできなくなると言っていた。だがもうそんな時代は幕を閉じた。これから世界は必ず人口知能などを大いに使う時代となる。何も悪いことではない。私の故郷は必ず再生する。使い方を間違えなければあの美味しいみかんは今後無くならない。味も消えることはない。

百年後も同じ景色が見られますように。